

氏名(本籍)	かとうゆきお	加藤行夫(東京都)
学位の種類		博士(文学)
学位記番号		博乙第1882号
学位授与年月日		平成14年12月31日
学位授与の要件		学位規則第4条第2項該当
審査研究科		人文社会科学研究科
学位論文題目		悲劇とは何か
主査	筑波大学教授	博士(文学) 荒木正純
副査	筑波大学教授	博士(文学) 阿部軍治
副査	筑波大学教授	名波弘彰
副査	筑波大学教授	上田浩二
副査	筑波大学教授	D. L. 川那部保明

論文の内容の要旨

本論文は、古代から現代および洋の東西にわたって悲劇作品と悲劇論を通観しながら、「悲劇とは何か」という古来より論じられてきた問題について、とくに観客の受容という視点から考察したものである。

論文の構成は、以下のとおり。

まえがき

- 第一章 「さまざまな悲劇——古典から現代へ」
- 第二章 「いわれなき歓喜と苦悩——二つの非理性」
- 第三章 「因果応報の悲哀——第三の座標」
- 第四章 「意味という感動——認識を求めて」
- 第五章 「偉大な悲劇——融合する座標」

あとがき／参考文献一覧

第一章では、ジャンルとしての悲劇は変容したのか破綻したのか、という問題提起がなされ、シェイクスピアの『リア王』の現代版としての映画作品や多様な上演が概観・分析されている。とりわけアーサー・ミラーの悲劇論、また、1960年代に展開した「悲劇の死」の問題が扱われ、現代において悲劇は可能かと問われている。

第二章から第四章は、これまでの主要な悲劇作品と悲劇論を座標軸で区分けすることに費やされる悲劇意識のあり方を非合理の謎であるとする見方と、合理的に解釈できるとする見方を両極とする縦軸、そして、悲劇を歓喜に導く肯定的なものとするか、暗く否定的にとらえるかを両極とする横軸が、交差してできる四つの座標面を措定している。

座標面ⅠとⅡについて論じた第二章は、ニーチェのいう悲劇が座標面Ⅰ(非理性+肯定)、ウナムーノや『ヨブ記』の悲劇観が座標面Ⅱ(非理性+否定)に位置づけられるとしている。本章では、文化唯物論的な立場からの悲劇観—ジャンルとしての悲劇を問題化しないイデオロギー性—も扱われているが、主としてスターナーやシューアルの悲劇論、および文化人類学的な演劇の起源論が扱われる。

第三章では、座標面Ⅲ（理性＋否定）について論じられている。D・H・ロレンスの悲劇概念の解説からはじまり、それが日常的に使用される語と同等で、「悲しい出来事」を意味すると指摘される。そして、それがイギリス初期近代の没落物語としての悲劇を支えていた悲劇意識であるとし、コンピュータによる悲劇概念の検索や古版本のタイトル、またエリザベス朝人による悲劇の定義を介して確認されている。アリストテレスにたいするホラティウス流の解釈によって生じた教訓的悲劇観は、シェイクスピアの時代になって教訓の意味を徐々に失い、感動を呼ぶ第四の座標面に推移するとされる。

最後の座標面Ⅳ（理性＋肯定）を論じた第四章は、量的に本書全体の約半分をなし、虚構としての文学作品、演劇作品を具体的に取り上げている。本章の悲劇概念こそ、著者が最も重視したいものであり、内容的にいえば第三章までが理論編で、第四章と第五章が実践編といった趣を備えている。まず、「眼」の象徴性について、説経節、謡曲などさまざまな具体例から盲目ゆえの認識といった局面に注目し、悲劇の感動にとって、認識という事実が中核的な役割を果たすとしている。ここでは『ハムレット』『リア王』『マクベス』『オセロ』、さらに、『ロミオとジュリエット』『アントニーとクレオパトラ』『トロイラスとクレシダ』の問題性が議論され、提起された仮説が検証されている。また、付随的に、「なぜ悲劇を見るのか」という問題設定のもと、アウグスティヌス、ヒューム、バーク、ヤスパースらの悲劇論が読み直され、「メロドラマ」のジャンルの再評価もなされている。

第五章は終章として、フランク・カーモードという「終わりの意識」について考察しつつ、再度『リア王』の悲劇性をアイロニー性とともに論じている。そして、悲劇とは、肯定と否定、合理と非合理とが織りなす四つの世界観、そのどれかであり、またどれでもあるとし、とりわけ認識が感動を呼ぶ肯定と合理の座標面Ⅳを中心に、否定も非合理も取り込んだとき、悲劇は最も説得力を増すという。絶望と救済、悲痛と歓喜、人生を四つの相のどこからでも見ることができる作品が、偉大な悲劇であると結論づけている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、英語・英文学専門誌『英語青年』に連載された諸論文をもとに、多くの人の批評的反応を受けて加筆・訂正がくわえられたものである。

1980年代以来、文学研究は歴史的・政治的側面が強調され、かつての新批評の制度が行っていた美学的研究が過去のものとしてされてきた。本論文は、こうした研究動向に逆行するかのごとく、1960年代末の「悲劇の死」論議以来久しく看過されてきた悲劇を取り上げ、「悲劇とは何か」という本質論的な問いを發し追究を行った。この問題設定は、微視的な研究姿勢を保持しづける者には巨視的視点を提供し、また、過去のものとして看過された過去の研究業績を、1980年代以降の研究動向のもとで研究活動をはじめた若い研究者に現在の研究の展開の意義を自覚させる機会ともなっている。本論文は、新しい悲劇論を呈示するものではないが、過去の悲劇観や悲劇論の膨大な総体にひとつの理解枠を提供するところに斬新さがあり、学的貢献がある。

本論文が取り組んだ問題追求には、古今東西の悲劇作品と悲劇論をかなり手広く見渡す必要があるだけでなく、相当数の悲劇作品と悲劇論のひとつひとつにたいして内容のある解説と議論が求められる。このような困難な課題に、著者は、観客論的立場からよく応えているといえる。また、著者は、広範囲な話題を巧みに繰り、最近の『リア王』改作映画から近代小説、浄瑠璃、童話などの関連素材を自在に処理し議論を展開し、読者を飽きさせることのない手腕を示している。たとえば、西洋古典学界の『オイディプス王』をめぐる論争から、盲目というテーマを介して『日本書紀』に、そして『弱法師』へと移り、再びアリストテレスの「カタルシス」の本題に戻る、その素早い展開ぶりには圧倒される。本論文の眼目は、悲劇作品と悲劇論を座標軸で切るところにあるが、それはかなりの程度成功しており、膨大な数にのぼる悲劇作品と悲劇論が鮮やかに巧みに図式化されている。また、「内在世」と「超越性」という対概念で悲劇の認識を解説する部分は、新鮮である。

本論文の悲劇論解説は、十分な説得力をもつものと評価しうが、悲劇作品自体の解釈となれば、必ずしも意

見の一致を見るわけではないだろう。高みからの広い眺望が、新鮮味のある包括的な悲劇論という難事中の難事を可能ならしめたことは疑えないが、その視点は、肉親や夫婦の関係の深淵をのぞかせる悲劇の直接的インパクトからやや退いたところにあるように思われる。また、客観的であることを標榜する論を展開しておきながら、悲劇とは感動であるとする本質論的で主観主義的な本音をのぞかせたり、今日こうした議論を展開することがもつイデオロギー性にたいして、十分な自覚があるとはいえない。本論文が示した過去の文学研究の清算・整理の意味は十分にあり、このことを疑う者は誰もいないだろう。だが、現在、学界で進行している文化論的文学研究と著者の立場が、一体どのようにかわるかが明確にされておらず、このことが少なからず残念に思える。とはいえ、本論文の意図は十分に達成され、本論文の価値がそなわれることにはならない。また、最近、新しい学風土での悲劇の読み直しが進行しつつあり、こうした状況下でも、本論文は重要な参考論文となることであろう。よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。